つに折持來り、主人の前に置、革の内にはきせる烟草あり、其革の上に火入を置て、たば粉をつぎ指出し、飲給て後、石にて灰を落し、右の革を元の如くに仕廻ふ、大名さへ如此、況や下々に於て、今の樣に多葉粉盆などゝ云事一切無し、

〔浚明院殿御實紀附錄三〕烟草は先代よりきこしめさるゝことなりしかど、もとより表立しことならねば、それを司るものも、内の御用と名付よべり、御火壺は眞鍮の器をのみ用ひ玉ひ、御烟筒は銀のほか用ひられず、〇中略烟架をつくられしとき、近習の人に仰られしは、かりそめの調度とても、世の末になり行ほど、華美にはうつりゆくものなり、天下に主たる身としては、いさゝかのこゝろまでも心をこめて、華美にならざる樣になすべき事なりと、仰られしとぞ、

〔閑田次筆四〕昔はなくて當時行れ、是がために田を糊する人、世間に滿るもの、茶と煙草なり、此二品の具を造る人も、夫を交易する人も、此物どもなき代には、何をしけんとあやしまるゝ計なり、

〔蔫錄下〕附考並餘考

甚矣哉、澆季之浴驕奢淫溺于事物也、而喫烟之興趣、爲最盛焉、丙觀方今煙具之製、筩包爐壺、皆以錦繡金玉彩飾之、而盡巧極精、曾不慮其費、滔々流弊、浸漬于海内、其奪民時、賊國家、聖人復起、未如之何已、

〔烟草百首〕或人曰、烟草一式の具をこしらへる職人、諸職の内三分一ありといふ、さもあるべき歟、

〔書言字考節用集七器財〕霧鬟（メガネ事見百川學海）　眼鏡（同）

〔倭訓栞中編二十六米〕めがね　目金の違はぬといふは、度をさしがねともいふをもてなり、眼鏡をめがねといふも義同じ、古歌に、

めがねさす光は穴にくまなきをいかでみ雪に目をきらしけん、方輿勝覽に、滿剌加國出霧鬟鏡といへば、もと西域より始れる物なり、もと硝子を用う、日本には水晶を用ゐ來れり、水晶は日

眼鏡名稱